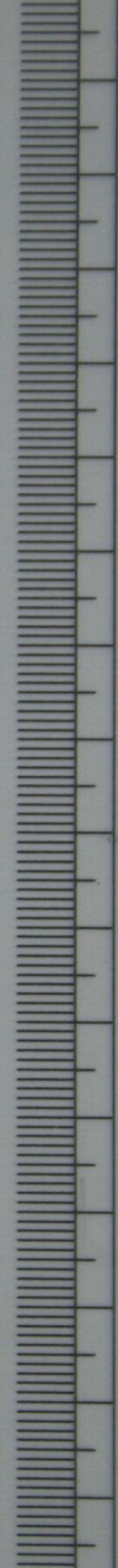


山家集類題

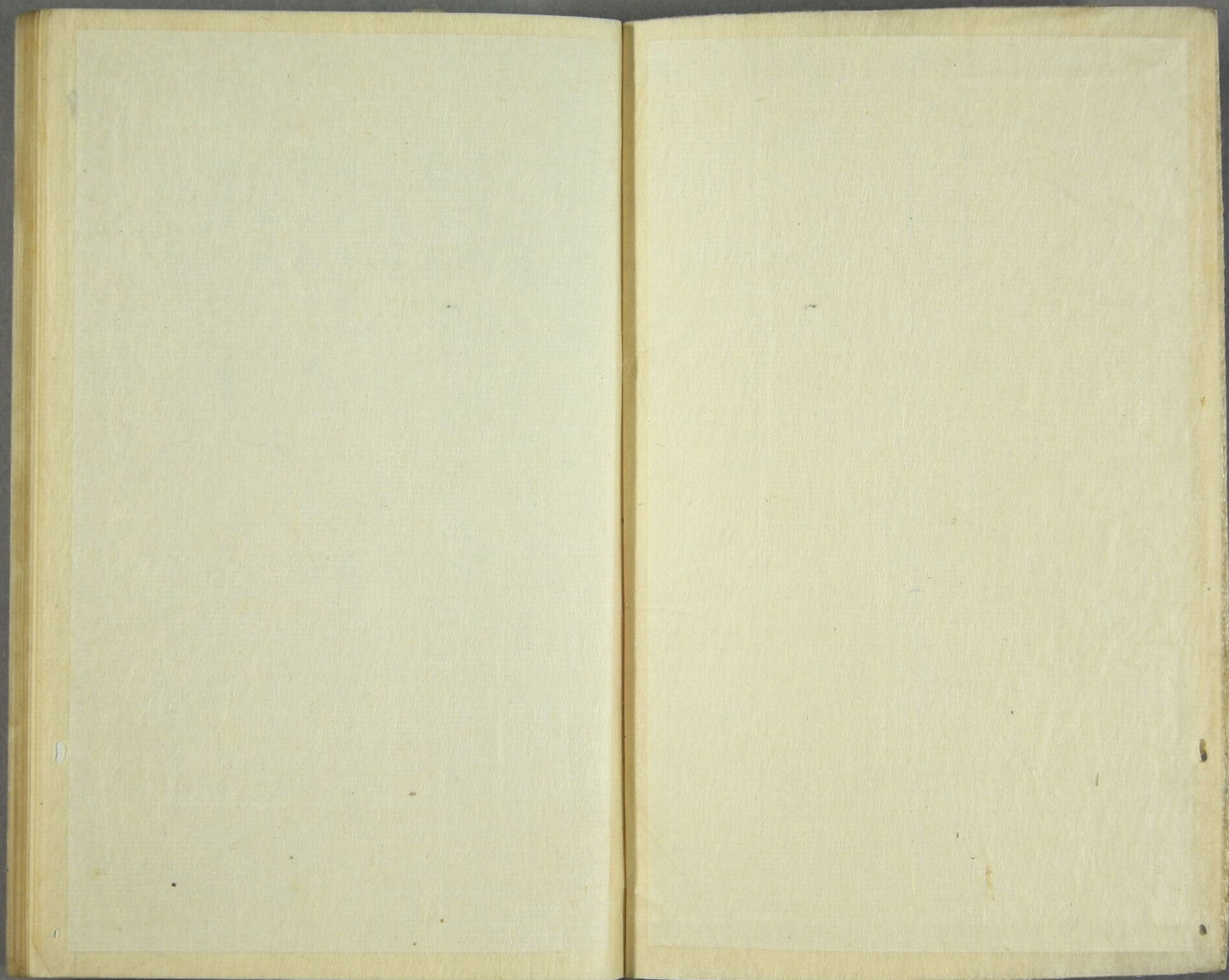
特別
イ 4
3159
B 6



75

70

65



14  
3159  
B6

山家集目次

上卷

春之部 二百二十五首

秋之部 二百六首

中卷

離別之部 七首

笑之部 十四首

下卷

神祇之部 五首

志之部 二百五十六首

世教教子五百八首



夏之部 百五首

冬之部 百九首

羈旅之部 百九十首

雜之部 二百六首

釋教之部 五十六首

世教之部 九十三首

山家集卷之上

春歌

とりのちよまをさちてふれうらなれ

まじしをばみもてれぬらるるのちのちにて

ゆいそりして付らるるまをいあてまよるるなほ

なごらたにまみわくして山何のちりいも似す

ゆえにわを

かよもも本れゆはわぬまにまよふいさふこのち

しよのく任付らるるまをいあて

山家にてまのたあはなはらぬまのちのちのち

山家にてまのたあはなはらぬまのちのち

山家はあわはらぬまのちのちのちのち





おもしろきまはれ日ぬのさうあつたにこの雪はほやらぬ  
わー  
お思はし

まゆり君やとむくはれたまはほやらぬ人のあき

お

まーれと谷の氷のひもたててまのまのあつたに

くろまの氷の氷のひもたててまのまのあつたに

雪のまの氷のひもたててまのまのあつたに

え日子はまはつたに

子日一へん入るあつたに

子日

まのまの氷のひもたててまのまのあつたに

子日する人にあつたに

子日一はあつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

あつたに

耳鳴れふのいささせむねり  
こころに初子のあひいづれそ人のまへ人  
こころ

わさつじん日は初子のあひわれにねや人の心ひく  
美菜にふせやふたをゆよよよ

こころつむの人のあわそを若きと遠く障りよ  
老人のいふ菜とくつよ

卯はつし七州のく出たは多事いさなぬの  
宗若菜述懐とくよ

あふらうまこれのくに政かうくこを  
野よりあまははるよなにする人そをゆらもなう  
のころとこくけよのこちたさうりるまの

あふらうまこれのくに政かうくこを

こころや月るまうけく越にまむつこけはきくせとら  
あふらうまこれのくに政かうくこを

はとけまははらうまよまてめしたおわさくは  
海道の旅とくよ

こころや海のみうまのそ桐はらそま  
なるらま伊勢のあこまよあ

はとけまははらうまよまてめしたおわさくは  
花のよまてつれまよ

かまへまははらうまよまてめしたおわさくは  
あふらうまこれのくに政かうくこを

春の影にまの影をよすがにあらはれしはなほ  
おのれにまの影

まの影にまの影をよすがにあらはれしはなほ  
おのれにまの影

おのれにまの影をよすがにあらはれしはなほ  
おのれにまの影

おのれにまの影をよすがにあらはれしはなほ  
おのれにまの影

おのれにまの影をよすがにあらはれしはなほ  
おのれにまの影

ひるねの影のたれにうらみは  
古よ砌の梅

何となく影をよすがにあらはれしはなほ  
おのれにまの影

おのれにまの影をよすがにあらはれしはなほ  
おのれにまの影

おのれにまの影をよすがにあらはれしはなほ  
おのれにまの影

おのれにまの影をよすがにあらはれしはなほ  
おのれにまの影

おのれにまの影をよすがにあらはれしはなほ  
おのれにまの影

おのれにまの影をよすがにあらはれしはなほ  
おのれにまの影

おのれにまの影をよすがにあらはれしはなほ  
おのれにまの影

おのれにまの影をよすがにあらはれしはなほ  
おのれにまの影



雪のよきそなたよもわらうとてしるべし  
梅のやわらうと

雪中書

くひすれまをわらうとてわらう竹の葉やほろろし

そらなる谷の雪のふりていれりていれり

雪の谷のふりていれりていれりていれり

くひすれまをわらうとてわらう竹の葉やほろろし

雪の谷のふりていれりていれりていれり

くひすれまをわらうとてわらう竹の葉やほろろし

雪のよきそなたよもわらうとてしるべし

梅のやわらうと

梅に雪のふりていれり

梅のよきそなたよもわらうとてしるべし

梅のよきそなたよもわらうとてしるべし

雪のよきそなた

雪のよきそなたよもわらうとてしるべし

雪のよきそなたよもわらうとてしるべし

雪のよきそなたよもわらうとてしるべし

雪のよきそなたよもわらうとてしるべし

雪のよきそなたよもわらうとてしるべし

雪のよきそなたよもわらうとてしるべし

深山不知春とよまを

深山不知春とよまを

山里の柳

山里の柳

山里の柳

柳風

夕霞のたはりのりくにうらなけり風がさるるま柳の

雨申柳

中し風の音をうけ礼るぬまはるま柳の京

水造柳

水底にうまみさうの色をて風にはるは柳の如

さほし

なまふらた鏡花のたはりの折入るるま柳の如  
や庭の月のなれるをて

雲をくちあはるるま柳の如く霞をくちあはるるま柳の如く

山道のまゑとよまを大まらあてんよみりた

まゑにたはれたるま柳の如く人にたはれたる人のまみり

まこりま

そえおるまゑあはるるま柳の如くま柳の如くま柳の如く  
ま柳の如くま柳の如くま柳の如くま柳の如く  
ま柳の如くま柳の如くま柳の如くま柳の如く  
ま柳の如くま柳の如くま柳の如くま柳の如く

帰雁

玉つれけりたもま柳の如くま柳の如く

霞中帰雁

何とまおつたたはりの天の京霞にま柳の如く  
ま柳の如くま柳の如くま柳の如くま柳の如く

山道のまゑとよまを大まらあてんよみりた

ま柳の如くま柳の如くま柳の如くま柳の如く  
ま柳の如くま柳の如くま柳の如くま柳の如く

おんまに

花

お花にさう花もむつれとさよとよのころがはなも  
春の月あつてさうさうは花もさうは花のさうさ  
風のゆるりしるさうさ

月これい風は花のさうさうさうさうさうさうさ  
花を待たす

今さうしたまをさうさう花もあらは安んずけし  
おつらうつれの心の花さうさうさうさうさうさ  
待た志代とよさうさ

またさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
花を待たす

またさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

花もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
花もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
花もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
花もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

花もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
花もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

花もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
花もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

花もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
花もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ



けせはあうりゆりなるよきおのひ出て

ちるまにやゆりや桜花びらにさるるあやうなる人

うたえてととさけなりになる人の花はよふとよ

まうてきまうとけしてまひける

年よしてあうりゆりや桜花びらにさるるあやうなる人

花の下まて月をさしてまひける

雲にまうり花の下まてなるむれにゆに月のあやうなる

まのゆにの花はなるよきおのひ出て

花のまやあうりにゆりや桜花びらにさるるあやうなる人

床風のまよふ人なるよきおのひ出て

なるあうりやゆりや桜花びらにさるるあやうなる人

木のまはなるよきおのひ出て

寐然もみちのまうりよふる登に活て出ようなる又のこ  
の花のゆりにまうりよふる登に活て出ようなる又のこ

寐然

もみちのまうりよふる登に活て出ようなる又のこ

花のまやあうりにゆりや桜花びらにさるるあやうなる人

花のまやあうりにゆりや桜花びらにさるるあやうなる人

花のまやあうりにゆりや桜花びらにさるるあやうなる人

花のまやあうりにゆりや桜花びらにさるるあやうなる人

花のまやあうりにゆりや桜花びらにさるるあやうなる人

花のまやあうりにゆりや桜花びらにさるるあやうなる人

花のまやあうりにゆりや桜花びらにさるるあやうなる人

花のまやあうりにゆりや桜花びらにさるるあやうなる人

おかしやろふや花にやうはらへて花にあらるみりーの心  
 をうらめて花のうらへに成にうらへて心のもてたにあらる書  
 まよやと花にやれいりーの心まに晴すわここの白書  
 ぐーの山梢の花をうらへるうらへる心まに晴すわここの白書  
 ありやろふ心まに晴すわここの白書  
 花にやれいりーの心まに晴すわここの白書  
 白河の梢をうらへてそらうらへる心まに晴すわここの白書  
 引之て花をうらへる心まに晴すわここの白書  
 花をうらへて月をうらへる心まに晴すわここの白書  
 たくひるまに花をうらへる心まに晴すわここの白書  
 身をうらへて心まに晴すわここの白書  
 花をうらへて心まに晴すわここの白書

花をうらへて心まに晴すわここの白書  
 白河の梢をうらへてそらうらへる心まに晴すわここの白書  
 引之て花をうらへる心まに晴すわここの白書  
 花をうらへて月をうらへる心まに晴すわここの白書  
 たくひるまに花をうらへる心まに晴すわここの白書  
 身をうらへて心まに晴すわここの白書  
 花をうらへて心まに晴すわここの白書  
 何とやろふ心まに晴すわここの白書  
 山梢をうらへる心まに晴すわここの白書  
 ありやろふ心まに晴すわここの白書  
 花をうらへて心まに晴すわここの白書  
 白河の梢をうらへてそらうらへる心まに晴すわここの白書  
 引之て花をうらへる心まに晴すわここの白書  
 花をうらへて月をうらへる心まに晴すわここの白書  
 たくひるまに花をうらへる心まに晴すわここの白書  
 身をうらへて心まに晴すわここの白書  
 花をうらへて心まに晴すわここの白書

花のうらみ

さび人の涙も似る梅が風牙に一のさきこをれつ  
しよ山やそ山とよふ牙を花ちるは人やはしん  
人せしすふもちして山を花をころも使ありは花  
おるく月の折しけ山梅花をる梅の之まはせ

花のうらみ 十五首より

さび人の涙も似る梅が風牙に一のさきこをれつ  
しよ山やそ山とよふ牙を花ちるは人やはしん  
人せしすふもちして山を花をころも使ありは花  
おるく月の折しけ山梅花をる梅の之まはせ  
花のうらみ 十五首より

おつるまの心の花のうらみのうらみのうらみ  
いよとちれと梅をかしの申しはぬや中  
風あそ枝をさるれくおまのうらみのうらみ  
吹風のなす梅ありあふさうく人の梅ははは  
なまのうらみのうらみの花のうらみのうらみ  
おるされめつしよ山とよふ牙を花ちるは人  
山やそ山とよふ牙を花ちるは人  
花ちるは人  
花ちるは人

百首 芥申花十首

さび人の涙も似る梅が風牙に一のさきこをれつ  
しよ山やそ山とよふ牙を花ちるは人やはしん  
人せしすふもちして山を花をころも使ありは花  
おるく月の折しけ山梅花をる梅の之まはせ

くさきさきしづくぬめりおの花のわれいもらん  
君も人をはるきし山裾これとを花よあらんとと  
山裾笑わとけてさゆゆらん人をあらそよんごめ  
山さそりゆるるさゆゆひびさうさく人にまれば  
花の雪の庭につらと疎つりかろ花やさういぢ  
なめつりいめわれ花の雪はくはるれ夕言  
りいさきよの流るる花や雪はほし雪の下水  
ねにふる花を散るるりい夏のさくれに入て出ぬ

遠山張花

りい山さきさゆゆ雪の暖をさける様なる  
花のういあやいもみらた  
物とわくは津門のいよせはさういおれは花やちぬ

ぼとけ風を吹あし白川の天のやち花はちうん  
いそわれけよのあふとれ出し風をよち花をさめ  
草よしてはちゆゆいさくをまかつくはるる  
りい山さきさゆゆ白雲の裾はあやららん  
山裾の木れさうい花の雪いさくし氷さ  
草風の花のあまなうりてちやれぬさ笑れ山さ  
さゆゆ雪の庭につらと疎つりかろ花やさういぢ  
りい山さきさゆゆ雪の暖をさける様なる  
花のういあやいもみらた  
物とわくは津門のいよせはさういおれは花やちぬ



なむとて花もいつくるれぬまのあわれもそ然りけれ  
押めりとはひけともあれたる花の心そかこころなる  
梢や風の心はいつてんあつ子花のこころはたか  
いそかはちてあれもあつ(ま)まりとあつるは花  
木れもとの花よこもい埋まてあつぬ梢よとあつらん  
よもこれ花のすれそよりの山花のあつるまを  
雲とあつてくけも梢の乳を花のまをまのれ月  
ちる花を中むらやあつて又こむまの梢よらつ  
まあつて枝もいつてちる花の風をうたあつるあ  
あつるあつた花よとあつてあつてあつてあつてあ  
あつたあつた花の心はいつてんあつてあつてあ  
あつたあつた花の心はいつてんあつてあつてあ

さの山梅はまうよ白雪のあつるはつちあつる  
花よこもあつてあつてあつてあつてあつてあ  
風よこもあつてあつてあつてあつてあつてあ  
花よこもあつてあつてあつてあつてあつてあ

雨巾着花

梢うつみにわけてちる花のあつるはつちあつる  
風のおれあつてあつてあつてあつてあつてあ

山梅枝まる風のあつるはつちあつてあつてあつてあ  
山路花

ちり初花の初をあつてあつてあつてあつてあつてあ  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあ  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあ  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

玉肌の花をちりけりてさるる愛のさてもむのめいりて  
敬てな花をおりしとよまよ

まゆみとれさふのさるる花のなほとど入は  
柳をさしひきたさくは柳に花のちりかき  
るるをさく

吹く風をひくさくは花を結る高柳の糸  
花のちりたるさるるひて愛をのさる柳をさ  
ちりこれい又愛花の匂いもさされたためめさく

荷代

荷代の水をおいたる引てうちひのこにさるる

蛙

うらうら池のついでさくさくさくさく水やまのせ

なたるる水の水をさせたとのこりてさるる

蛙

ちりさるる水の水をさすはひのさくさくさく  
みさるる水の水をさすはひのさくさくさく

蛙

うらうら池の水をさすはひのさくさくさく

萱

何とていささかさるる底の草は誰か入て萱はさる  
誰か入ていささかさるる萱はさるる

萱

萱はさるる水の水をさすはひのさくさくさく  
何とていささかさるる萱はさるる



夏奇

野々々々

限あけそ衣まろくまぬまてくは花をまろく

夏のうたよみろく

草花をむろくあけて山まると花うくの心まそろ

夜卯花

ちろよ(ま)月をたろくの卯花はろくはくろくすぬのうた

水邊卯花

たつ川きりたちろくをくは後には井まの波よまよ卯の花

山川の波よまよ卯花をまろくそや人はゆろく

社卯花

神壇のろくは(ま)便あけやゆまゆろくそろ卯花

東のうちに郭はまきこしよよは

妹しよもさびやわね郭はまきこしよのまひるはれい

時を

我やとた郭へちまきこしよこしよの時を待てくはれ  
君のねをまきこしよの時をこしよのまひるはれい  
町をまきこしよの時を待てくはれ  
五つうちた郭はまきこしよの時を待てくはれ

なまきこしよの卯月もさびやわね郭はまきこしよの時を待てくはれ  
郭はまきこしよの時を待てくはれ

町をまきこしよの時を待てくはれ  
なまきこしよの時を待てくはれ  
人にりりして

おろくの心もさびやわね郭はまきこしよの時を待てくはれ

なまきこしよの時を待てくはれ

町をまきこしよの時を待てくはれ  
不見聞は想とよまきこしよの時を待てくはれ

郭は卯月の心もさびやわね郭はまきこしよの時を待てくはれ  
雨申時を

二月の心もさびやわね郭はまきこしよの時を待てくはれ  
夕暮時を

里ろくたそれと郭はまきこしよの時を待てくはれ  
山寺の時を

郭はまきこしよの時を待てくはれ  
時を

ほろまけんおのこらむのほいぢに花の井しりれ  
時をぢれとわぬ一ふさきこころ人よりこころ  
けしきんいら平なる花とてふくはし人のせうら  
かこらぬ一そは夫の時をいこころあもしきくあ  
時をむいちまらふいはれよもそ花のふふ  
時をのした不首がふらに

なとまけんおのこらむのほいぢに花の井しりれ  
時をぢれとわぬ一ふさきこころ人よりこころ  
けしきんいら平なる花とてふくはし人のせうら  
かこらぬ一そは夫の時をいこころあもしきくあ  
時をむいちまらふいはれよもそ花のふふ  
時をのした不首がふらに

百首弁之中部は十首

なとまけんおのこらむのほいぢに花の井しりれ  
時をぢれとわぬ一ふさきこころ人よりこころ  
けしきんいら平なる花とてふくはし人のせうら  
かこらぬ一そは夫の時をいこころあもしきくあ  
時をむいちまらふいはれよもそ花のふふ  
時をのした不首がふらに

花

おほいの人とていふおのこらむのほいぢに花の井しりれ









空蒼あるおもひのちる夏これいそむまらみをおもひ  
影~~~~~

紅のまをうらうらとそめたるうさや人のあはしたるあ  
茶室のてらよるれわたるの宿もけい宿のうそとる人  
夏けよの月ころもやなるも人あはれうらうらこのあやに

蓮池ついで

あつらひ月やうらよひもあはれ蓮の花咲ふらう  
いさう~~~~~

風よのこをちよとて行て泉のまをうらうら  
影~~~~~

君らむきけれあうら水の流れまをそくしはら  
水邊の納涼とよとよおらうらうらうら

水のきたらうらうら木梢のせいせうとあまらけ  
木梢の納涼とよとようらうら

らよとまの風やまをうらうら友よあはれ  
類不知

夏山の夕下風のすいせにならぬ不汗のこあはれ  
柳も~~~~~  
ひやなすてすあはれうらうらあはれあはれにあはれ

涼風如秋

あはれうらうらあはれあはれあはれあはれあはれ  
お月如秋とよとよあはれあはれあはれあはれ  
又水もあはれ~~~~~

お月のあはれ~~~~~

山崎待秋とよまき

山崎待秋とよまき  
山崎待秋とよまき

山崎待秋

山崎待秋とよまき  
山崎待秋とよまき

六月後

山崎待秋とよまき  
山崎待秋とよまき

秋平

山崎待秋とよまき

山崎待秋とよまき  
山崎待秋とよまき

山崎待秋とよまき

山崎待秋とよまき  
山崎待秋とよまき

山崎待秋とよまき

山崎待秋とよまき  
山崎待秋とよまき

山崎待秋

山崎待秋とよまき  
山崎待秋とよまき

山崎待秋

山崎待秋とよまき  
山崎待秋とよまき

天河のよのせむい昔はたのりーのしひーいよもさうー  
あひまらる天れ川のゆふくれはほまほやあまらん  
行つてはれまらし七夕のふれううやたあしる

臨の井りまこるまて

秋のこいたをまよむとて

大のこの落しは何のちるなるか之袂ーとているまをさう

也ーいん

いそりのこあますのこふりたをたのあまらたあはれ  
まよーいよまよまよあまのまよやりーまよいよまよまよ

秋

あまらしてて衣まゆゆの秋のまよる秋の夕のつせ

秋の風をたよまぬ

あまらた秋の夕のたをまよりーとあぬ秋の上風

隣の夕れ秋の風

あまらて衣まよまよまよた秋のまよる秋の夕風

也ーいん

あまらて木草のまよまよまよまよ秋の衣まよ

野秋似錦とよまよ

あまらまよまよまよまよまよ秋のまよるあま

と秋のまよまよ

あまらあまのまよまよまよまよまよまよまよまよ

秋のまよまよまよまよ

あまらまよまよまよまよまよまよまよまよまよ



わらわのこころは花のむすもすまきにあててこころ秋音  
けしきよ花

おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと  
そ花さきよこころこころこころ

夕玉花をさしけり神も玉花をささけりる秋のまよきさきのこのおと  
おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと

おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと  
おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと

おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと  
おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと

おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと  
おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと

おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと  
おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと

おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと  
おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと

おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと  
おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと

おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと  
おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと

おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと  
おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと

おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと  
おとけり神も花をさけけりる秋のまよきさきのこのおと







夕のそとれ出とよまを

おとす人るまいたのたふれおんくすなるくつはむしこる

おんほそくをるるおしそ居れまらちくむ

れ吾おこりむ

よの地の遠くもれ我れそくそむの吾らはむり水の

年ころちやされま人の伏之し任をひて居あつし

くましなれそくもくはそくそくそくそくそく

おて入神よををりけしそくそくそくそくそく

秋のすましお出のるしをまこて

そらぬしよおがはうしお出の秋のすましはひもわんを

居あつしおりまのくそくそくそくそくそく

十月もつめつしおんそくそくそくそくそく

しあれそくそくそくそくそく

そらうつし津なれまらしあつしあつしあつし

初は初しをまこ

授そつしおのそくそくそくそくそく

初中初雁

仲子て八まのそくそくそくそくそく

初り入てしをまこ

鳥おれくむつめおんそくそくそくそく

雁お遠を

そら空を越しおけそくそくそくそくそく

霧中雁

むつめつめおんそくそくそくそくそく

霧上雁

霧上のこころこころにまきくの霧こころる玉れ

都しうら

つらうして風しれそ 雲一のまらうこころのあめあめ

暁の床

さあすねあめにゆき衣のまの床よこころやなまこころ

夕暮に床をまこ

あつらうやあつらうひて 雲のあつらう秋のまら

田舎の夜

あつらうの夜をく 雲のひよおらうまらておらう

出立の床をまこ

いさうあわそあうやあつらうはあつらうあつらう

人をこころて 少野にまらうらう床のあつらう

床のおをまらうらうて 狂人のあつらうあつらう

小舎の床に 狂人のあつらうあつらう

あつらうのあつらう小舎のあつらうあつらう

床

あつらうあつらうのあつらうあつらう

あつらうあつらうあつらうあつらう

あつらうあつらうあつらうあつらう

あつらうあつらうあつらうあつらう

あつらうあつらうあつらうあつらう

あつらうあつらうあつらうあつらう

あつらうあつらうあつらうあつらう



月をてけし入しけしるまもたにきく姫しき秋の山里

八月十五夜

山のそとを女を育いもうとてまよひこゝにいさるる秋の此月  
うそいねといふ月の月をよみて秋の半を言にきく  
天川名をなれるるかひありて今宵月日をもたすこころ  
さやかきかけきてあや秋の月をたにあらるる日こころ  
おしけよえん秋のこころもて月を舟こころ今宵か  
秋のこころもて一秋のあこころおる一せのよ月かあき  
おひせぬ十五のあこころおるこころいせ月のかあき  
くもれる十五夜を

月をけいけしる雪につらけて今宵をくもるにきく  
終夜月をさる

清き初月れ是は清き初月をいさるる月をいさるる

五月十五夜

立田の月すむこころのあこころをいさるる月をいさるる

あきの月をいさるる

清きこころの月をいさるる月をいさるる月をいさるる  
夕てあきおれぬをわが指しん明かかて月のすいおけは  
月夜をいさるる月をいさるる

雪消るるをいさるる月をいさるる月をいさるる

月池の氷をいさるる

氷をいさるる氷をいさるる氷をいさるる氷をいさるる  
池上の月をいさるる

みそるるあきの月をいさるる月をいさるる月をいさるる

日くまに海照るよしてくまのまらるる

舟も月れきの影よりにいりしつらしひろ海の花  
池もすむ月もあまらるは雲の拂ひのまらるるまらるる

海透月

清くすむ月すむはのほくはのりのおの物くく

海透明月

難波い月のはるはのりて波の音も水もさく

月あそ花

月のもたは花よそひてあそ花のいのの

宵のまはあそ花もさくまらるる有詔の月のけり

月あ野花

花の色さくはまらるるあそ花の月そあそ花のいろ

月照花

月なくい言もさくまらるるの月花のいろくさ

月あ花

月もむとあそ花のいもむやまらるるあそ花の

月あ花

花もあそ花のいろもまらるるあそ花のいろも

月あ花

花もあそ花のいろもまらるるあそ花のいろも

月あ花

花もあそ花のいろもまらるるあそ花のいろも

月あ花

花もあそ花のいろもまらるるあそ花のいろも

さしあふ心ちをすれ秋の月もむ旅の掉子舟のてを

月夜虫

月れすむあふたすく蒼涼のさくや秋をしる  
露るのこむくおらむ月影ふ小秋の枝の松考れし

田家月

白露のこもか田の稲穂さす不すも月と暮まる

越

月らりて月にはるし通ひさく隣へつこよをれ細  
松の木れるまらつらつ月のみけうのさくこて

月をいこもてきよらたよまを

波てまふすむあ縁の女うらひく秋にやる月影

旅屋の月とふみこよまを

月をたきもたやまへ我むすい置され能へ

旅屋の月とさくこらをまを

表しる人こらりもさめ旅ねの床よやる月け  
月やるぬれしつねの波しし袖あひらけ契あま  
都て月を表とちけい敷まうあのみすえいこら  
月前よ遠くのそむこよまを

隈もる月月の是に流るりて我言あましりんそ  
月前よ友にあよこよまを

婿しきは夫よあよけ契あて月い心の流りけし  
遠るるおよこらて旅をうらる人のもと月こら  
けういこら

月のやういの光るがふてとひもそこら通り









さかちて月ちりしはせきのこまよふに水もさかちりて  
いととせしはるる雪のうらちりて月れあくるはるる川  
あふまゝありに月のみをひてきてさむ秋のあか  
くもしたまひ月れひるる海にありは秋のこころは  
月ゆかりしはさしたる秋の氷のうらちりて  
天のそらおるる雪をみればさむ秋の氷月  
かきこるるぬおゆきは秋の氷月さむるよあけ

都

みゆきもむ天北川さへはなれて月さかちるやとくみのお  
さかちるるぬ月さむるもさむるさむるさむるさむる  
ありし秋のぬおゆきは秋の氷月さむるよあけ  
うらちりてさむるさむるさむるさむるさむるさむる  
こころのけ

さかちるる雪の氷にありしはさむるさむるさむるさむる  
物りすむ雪よ月れさかちるるさむるさむるさむる  
たつよきとせしはるる雪よみのお月の中は  
葉の尾すすむさむるさむるさむるさむるさむる  
さかちるるさむるさむるさむるさむるさむるさむる  
雪はさかちるるさむるさむるさむるさむるさむる  
月さかちるるさむるさむるさむるさむるさむる  
さかちるるさむるさむるさむるさむるさむるさむる  
さかちるるさむるさむるさむるさむるさむるさむる

百首

さかちるる雪の氷にありしはさむるさむるさむるさむる  
さかちるる雪の氷にありしはさむるさむるさむるさむる  
さかちるる雪の氷にありしはさむるさむるさむるさむる  
さかちるる雪の氷にありしはさむるさむるさむるさむる  
さかちるる雪の氷にありしはさむるさむるさむるさむる  
さかちるる雪の氷にありしはさむるさむるさむるさむる  
さかちるる雪の氷にありしはさむるさむるさむるさむる  
さかちるる雪の氷にありしはさむるさむるさむるさむる

あはるる

た

月をこめてありのこころをなつかふひなきはなるやとひける  
まをけるさうの懐の仲の念をこころにほす月の白波  
さびしけいちさとのけし敷るくはさくわくもし月の影  
大いけの秋は月につまきて映るる風の音さ  
何とていよたにさるさ出ささう一人に月をこめて入ん  
さびしうさたにさるさまかけるも我れたる月の影  
うまももさびしうさう一人に月をこめて入るさ  
月をこめてさるさうさう一人に月をこめて入るさ  
九月十三夜  
こころにほすおえの影にすむ月の光をさるさくこの白波  
雲消し秋のさすはのさるさうし月をこめて入るさ  
は九月つまきてあそびさう一人に月をこめて入るさ

月をこめて秋をけりまると年いなりありあふとさうさうさう

獨園挿衣

ひるねのさむむさるさうさうさうさうさうさうさうさうさう

陽里挿衣

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

菊

いづ秋も秋ありあふさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
秋ありあふさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

月影挿衣

あそびさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
京極を政大臣中納言さうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

うららるるぬの浦波のひりーむすのつらに  
ふなきいよまゝいよまゝをぬれぬに里か將人  
すめて葉集りてなまをせらるゝくひる(ま)り  
天の任やあつるは葉集そまらぬのまじよ(ま)り  
ふもまじよ(ま)りぬるゝをまじよ(ま)り同葉まじよ  
まじよ(ま)りぬるゝをまじよ(ま)り  
返てる人いよまゝをぬれぬに里か將人

かー

かまのつらにまじよ(ま)りぬるゝをまじよ(ま)り  
ぬるゝをまじよ(ま)りぬるゝをまじよ(ま)り

紅葉集りてなまをせらるゝくひる

いよまゝをぬれぬに里か將人

山歌紅葉

深てまじよ(ま)りぬるゝをまじよ(ま)り

霧中紅葉

錦てる波の拍をみまぬにまじよ(ま)りぬるゝをまじよ(ま)り

紅葉集りてなまをせらるゝくひる

限あつていよまゝをぬれぬに里か將人

ぬるゝをまじよ(ま)りぬるゝをまじよ(ま)り

まじよ(ま)りぬるゝをまじよ(ま)り

かまのつらに





けりけり花は花のやまに城のうらうらめりて

曉花葉

時をよとけりあはれとこよゆわいありにこぬのまき

日暮花葉

山鹿の月よ木葉を吹りけて光りよの氣をさるうら

源上花葉

木枯し岸れぬ葉やうらうらひつたにちゆの白葉

水上花葉

立田姫際一梢のちるあふ紅あふふ山川のあ

暮花葉

おぼゆるありろれぬの色そめてひまらうことわら

草花 野路花葉

紅葉ちる理りふらてけ人のむるぬまき錦さる

山家花葉

乃ちちり名い木葉の煙まぬりきさする冬家これ

木葉をれい月よんそあくるみ山のれよすわむと

山家

おぼ月木葉のなるるむまたにふらうらう山のて

冬

難波江の入口のきよおきて浦地むよはなけ

むかひむれうらむとておねよいくく女花

水邊 寒草

おぼあひて色あうむかきこれかの林くさる難波の

枯野の草





戸をわらばるの流し月をてはひらるゝたふさるるふさるる

手もろくも流のうらよすむ月を渡しうらうら

月おろるまをててん

花よをく露もやほり

氷くぬるのり京風をて月も是そてひかひら

庭上冬月とよまを

山家冬月

冬枯のすまをけちる山けくも月のすむけし

月おろるの木まもしうらててて其庭けまは婿か

舟中霰

雪はさくさく

松人のまのけのうやれ下り

松木にあのうたのこも

たのめうてたふらうら

冬もてて思ひのこり

ありれもそおのこく

つゆも

雪

山桜花ひびきて 泳半は木玉の花をさあやうりて

夜初雪

月出る初しあらぬ 山れこのまむも雪はのらき

夜雪似月

木のまの月れり けしこゆかきこしあふらたぬき

枯雪も雪のまこころを

氷ころるやこころに 降雪いこにお花の心死にれ

雪をこを埋む

降雪まよふに 葉も埋まてさあぬ山よをさすは

雪埋竹こよまを

雪埋むその景竹 けりてねくら来るむ 雀か

仁おさの馬をよめて 山泉閑居見雪とくまを  
をよませ給らるま

降つる雪を友とて 暮あての日は暖かき けいこ山の里

山花雪とよまを

年れ日いとよまありけり 雪も山花も海に流るる

雪期待人とよまを

我やたにたふくみれ せもこまきむ 人の心つてしむ

雪朝人き友とよまを

海もむらぬのやこころもあふにれ 嬉しく笑ひたてはるる

雪の朝雪山をふりて 眺望とくこころなるま

たけのりる朝日の影のふんまに 影の雪いきてけすく

社歌雪



たゆむる相れあひのまを〜山とていふよきなを  
大原いせま〜を雪れさるあけてはもる人七海にさる  
雪を〜とむ〜はま雪にひ〜のあまのあまこさる  
雪志の巻のほりま〜して海あ〜人〜  
梅〜雪の〜人〜して昔年の〜さる〜  
麻然入る大原よす〜はかり〜  
大原い〜の〜の近なる雪あ〜を〜

カ

と〜教り〜袖〜ひ〜の〜の〜  
秋の〜は〜  
冬人の〜雪〜  
雪深〜埋〜く〜  
山

雪〜巻〜あ〜て〜  
も〜い〜い〜  
〜に海〜て〜  
人〜と〜雪〜  
冬〜十〜

花〜れ〜も〜ち〜ぬ〜山〜は〜  
ひ〜す〜む〜片〜心〜  
は〜の〜ふ〜れ〜  
ヤ〜ゆ〜お〜  
と〜ま〜す〜の〜  
さ〜つ〜は〜る〜  
山〜は〜い〜

風きてよすれそやそ水つかりる波る此ののや行  
がの山麓のやね雪をうかむいとしそや雪のり  
宿まに林しうしこまけせし一燈のあるお野の山

鷹狩

あはせくる木みれも一冬の狩はしじいさひ人のあまをる

雪の中鷹狩

うねくると雪よきうすはくねも羽音上踏きたくして  
降雪にいそしめくけ増してうおなきいこの系  
月の前炭電こころを

限あらむ雪うそあふ戻の御月にのすけお

山としまの深としよ

まふくも初雪なこそかうかかちちてくくく人のたれと

山としまの冬としよ

まふくも初雪なこそかうかかちちてくくく人のたれと

冬れすいよみ

淋しうたにたる人の又もあはれなう人冬つ山と

野

棠うよ一尾のちひなたちてすとる風とあまの  
谷風を戸を吹かけてし物なうと尾の意くくう  
牙と志こ一葉れ音はる水も果吹風も衣入る

山系早暮

あらうも棠のあまをたちえてまれぬをけあら

東山とて人こ

年亦しそのは志をけあらねるあかりをす



程中も坊主一羽のうちはも坊主つらういひは  
年ひびく何いあこらうはも同好の故水  
てきく何りしてさうれりやとさひらうよ何  
さあ〜とていひたる

こあは〜とせ夫はるれして別なよいさあを  
遠く所りするもわうさう共のあふ赤ま  
りあひうたう〜と別のもつらうあつ  
らうよ

さうもいおあよとをむむさあその山路よとぬ別の  
回りつ不の梅のあさうさ〜とむむおあえ  
付とやける

妙手は夫は別の中よ〜とあめりあはむむあは

久〜とさあ〜とけさあ〜とさあ〜とさあ〜とさあ〜と  
てさあ 女房六角局

夫のさあむ〜とさあ〜とさあ〜とさあ〜とさあ〜とさあ〜と

異郷旅歌

誰かよ 任る方 此の坊より (キトあり) けり  
はるしき ことなき 津の志 (けり) けり

まどくして 隣とあま 垣をむして 涼なくして ちや (ちや) ちや

志和 泊りありのころ なるに へり ちや ちや 九月

何れよ され 昼のむら けり ちや ちや けり けり けり

秋のれ 美の 秋の けり けり けり けり けり けり

まどくして 大まの 女房 けり

美を ちや ちや けり けり けり けり けり けり けり

志和 湯あり 京の けり けり けり けり けり けり

けり けり けり けり けり けり けり けり けり

又りりして



落なきー 忘れ小敷も枯もくいつち都も秋もあらし  
久ー ゆるし人

去る秋の落もさあぬ 都もなると急し舟出ぬ  
八月つきみのなごのせてお白河のまうらなるよりある  
換るる都の付るるよまこれさこのー くれえ互と  
あうてきこなりお長も秋同楽さー かくん  
たをここれら身はあそこの落す月のやれ  
川にたをこ地よそこの秋の風身もー せし  
とあうてP入てとをうら

秋のこよよー 心へさあつた月へさすあつたのけだ  
郭城たぬよのせりー ありさるは便よ付て女房の  
わくわく

水茎れく流すもきこいそるま心れうちな故てあつた  
こー

程をこ通ふふのむもくー けうま流せぬ茎れ  
又女房つこー なる

いー けうま付ておむが契ー だのさるいこよ  
かむる便よありむむのこよさるうて又程さる  
こー

おむ人さるもさやむら此別よー ともさるよ  
山とにさううて付るよ一 弁れ城のさあつた  
てあへる

竹のさるもあつたのすくさるまこてあつたやうさ  
世をのりてさー けうまのこよさるうてな

そのとてうらまはすもむ(きり)てゆるるよ  
竹の根をなすてうらまはす

そのとて竹の根をなすてうらまはす

とて

長くは竹の根をなすてうらまはす

衣をうらまはすてうらまはす

海邊に立旅をこころをなす

はちまき破れぬこころをなす

寒旅をなす

旅をなす竹の根をなすてうらまはす

たひくはるうらまはす

とてうらまはす

旅をなす

何子のうらまはす

とてうらまはす

そのとてうらまはす

のうらまはす

何國のうらまはす

りやとて仁和二年十月十日のうらまはす

報中まはす

かゝれ社をなす

るがし木向のうらまはす

長うらまはす

かゝれ社をなす



後々女史の経年くまの飛年の水は氣味一つ  
六波羅大政入道持經者千人ありてはるわ  
りありてくまの付るやそのついでに  
始會一室の秋ありまた新の清さを極め  
りつねをよきて

清女(よほの光のま)にさかかみのこゑを  
何しとく人をまらちてはぬ(よき)

何と形影のこゝとすむいむありてそ  
まし海書(ま)まらちて神年の清さを  
一むり(ま)まらちて神年の清さを  
まらちてはぬ(よき)

昔之(一)神年の清さを(よ)か我新を(ま)やと  
しぬ

三國のつと人(ま)まらちてはぬ(よき)

久しゆ人の心をよしとされくまは  
ひし(ま)まらちて神年の清さを  
いつら(ま)まらちて神年の清さを

紫尾のま(ま)まらちて神年の清さを  
たの(ま)まらちて神年の清さを

昔我(ま)まらちて神年の清さを  
いつら(ま)まらちて神年の清さを  
和(ま)まらちて神年の清さを  
この(ま)まらちて神年の清さを  
てぬ(ま)まらちて神年の清さを



龍のまじりおのりそくはちをりて

久しうて我はのまをさしおほ海をいふまにそなをいそ  
こを又我は信うくそくはちをりおのりそくはちをりそく

雪のまじりそく

おのりい雪のまじりおのりそくはちをりて  
雪ついでおしをり候もかをりはちをりおのりそくはちをり  
むとこり梅のまじりそくはちをりていそくはちをりそくはちをり  
まじりそくはちをりていそくはちをりそくはちをりそくはちをり  
折しそくはちをりて雪のまじりそくはちをりそくはちをり  
ゆくはちをりおのりそくはちをりそくはちをりそくはちをり  
谷の尾まじりおのりそくはちをりそくはちをりそくはちをり  
そくはちをりそくはちをりそくはちをりそくはちをりそくはちをり

そく

そくはちをりそくはちをりそくはちをりそくはちをり  
大匠のむかしそくはちをりそくはちをりそくはちをり  
のまじりそくはちをりそくはちをりそくはちをり

そくはちをりそくはちをりそくはちをりそくはちをり  
そくはちをりそくはちをりそくはちをりそくはちをり  
そくはちをりそくはちをりそくはちをりそくはちをり  
又あつちた

そくはちをりそくはちをりそくはちをりそくはちをり  
そくはちをりそくはちをりそくはちをりそくはちをり  
そくはちをりそくはちをりそくはちをりそくはちをり  
そくはちをりそくはちをりそくはちをりそくはちをり  
そくはちをりそくはちをりそくはちをりそくはちをり

新造すしきりになんとも二重につまみかたをわたり  
のちり足のあやうしなるよたるゆるりかたしてて  
Pはくつきそ

めりあはしこのびくそたるのりかたをわたり山のびくそ  
やそそれりなは大師の申はありありPをせ  
おまへゆりたるびくわはいつとそそののびくそは  
なりそそのよの人はわいつとそPをせ  
山りなむすてくやたに又そののびくそをうけ  
えりたるてくはるあつとPをせ  
おのさたるのりくそやちをPをせ  
かたしけりおまういりてくたつきのり  
ておまおひくしなる師よありそり

るふれちるしにこそおまへゆり  
たるのふすおまういりおまへよるくそ  
のふすいりわりちるなるのあつと  
暮ふくくつこたるも存おまへる  
つよこゆりおまのりちを

おまのりよりたのりしててくはるあつと  
若造すの大師の師教はそそり  
大師の師教はそそり  
はまろともおまへゆり  
わたりおまへゆり  
つよいりなるしきり  
おまへゆり





ものささうて形は花にけつをさす  
こいしむせいのさつふいしあをいそきああもの気絶  
仲なういまたつとてあまものあはれさうはらど  
しうあて

あのみよくおひもまほふもそあはれさうてあはれ  
ぢーらん

いそくはらめなうはらりめくこまきさあある  
霞くはのやむさうはてはく細つ仲のあまの  
あまのいそくはらひまゆのふりさああはれ  
いそくはらひまゆのふりさああはれ  
國めくはらひまゆのふりさああはれ  
さけるよ人のいそくはらひまゆのふりさああはれ

いそくはらひまゆのふりさああはれ  
西の國のいそくはらひまゆのふりさああはれ  
ふりさああはれ  
もの倒るぬまゆのふりさああはれ  
いそくはらひまゆのふりさああはれ  
あ國（けり）さああはれ  
八幡のいそくはらひまゆのふりさああはれ  
年（て）又その社をさああはれ  
あはれさああはれ  
若こーねてあまのさああはれ  
あはれさああはれ  
さああはれ





あはれのけしきけりて  
すぢもあつてはるをいひて

奉入る浦のあまのこしはさうとて  
くろくはるるをいひてはるるをいひて

あつてはるるをいひてはるるをいひて  
あつてはるるをいひてはるるをいひて

あつてはるるをいひてはるるをいひて  
あつてはるるをいひてはるるをいひて

あつてはるるをいひてはるるをいひて  
あつてはるるをいひてはるるをいひて

あつてはるるをいひてはるるをいひて  
あつてはるるをいひてはるるをいひて

あつてはるるをいひてはるるをいひて  
あつてはるるをいひてはるるをいひて

あつてはるるをいひてはるるをいひて  
あつてはるるをいひてはるるをいひて

あつてはるるをいひてはるるをいひて  
あつてはるるをいひてはるるをいひて

あつてはるるをいひてはるるをいひて  
あつてはるるをいひてはるるをいひて

あつてはるるをいひてはるるをいひて  
あつてはるるをいひてはるるをいひて

あつてはるるをいひてはるるをいひて  
あつてはるるをいひてはるるをいひて

あつてはるるをいひてはるるをいひて  
あつてはるるをいひてはるるをいひて

殊世月時あるはさあやの峰のまてめはむと  
殊世月時あるはさあやの峰のまてめはむと  
あるやとすして

平字流のあふゆるさるるに  
かゝるはさあやにすむ月はさあやの峰のまてめはむと  
かゝるはさあやにすむ月はさあやの峰のまてめはむと

あつとすして  
あつとすして  
あつとすして

あつとすして

あつとすして  
あつとすして  
あつとすして

あつとすして  
あつとすして  
あつとすして

あつとすして  
あつとすして  
あつとすして











ゆりてをきまうり分ゆり人の心はゆり

れ

ゆりてをきまうり分ゆり人の心はゆり  
あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

あまのまは

あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

あまのまはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

そのやうにあらはれむらうらうは言はずに  
よこせりてはれたる言はいとくすもて  
神をさうり又の神に

今春より長とあつてふらて鬼の言をよそたにゆれ  
まれば下とあつてまをさるせ給てあわらけりて  
いふとせりてゆりてあつてふらてかてせ給  
て十日早てこけりてあつてせ給ていふの  
てりて

あつてふらてふらてふらてふらてふらて  
てりて

山のてりてふらてふらてふらてふらてふらて  
待賢門の申物をいふ局はとせむしを

てりてふらてふらてふらてふらてふらて  
ふらてふらてふらてふらてふらてふらて  
てりてふらてふらてふらてふらてふらて

山おろす鬼の言はとせむしをいふ局はとせむしを  
長なすすかかあつてふらてふらてふらて  
うたをてりてふらてふらてふらてふらて

てりてふらてふらてふらてふらてふらて  
山はとせむしをいふ局はとせむしを  
かの楯といふてりてふらてふらてふらて  
てりてふらてふらてふらてふらてふらて  
てりてふらてふらてふらてふらてふらて

る人せもあつたはそへて藤川へあつ  
たりはつかるつてかいはあるやうに  
上りていふとよきとせしきへうは  
知て上りたりはうとよきとせしきへ  
けしきへうにうはしきへうとよき  
けしきへうとよきとせしきへうと  
まじりていふとよきとせしきへう  
かたがうとよきとせしきへうと  
うはうとよきとせしきへうと

あまのなる名を御上の御名は雲階のまき  
苗代をまきとせしきへうとよきとせし  
かくせうとよきとせしきへうと

たちまちに雲階のまきとせしきへうと  
す色の代り水とせしきへうとよきと  
まじりていふとよきとせしきへうと  
て上りていふとよきとせしきへうと  
はう待賢門院のまきとせしきへうと  
いふとよきとせしきへうと

此のまきとせしきへうとよきとせしきへうと

まきとせしきへうとよきとせしきへうと  
御水とせしきへうとよきとせしきへうと  
まきとせしきへうとよきとせしきへうと  
まきとせしきへうとよきとせしきへうと



山花よこむのさきうましくとねまなしくたるおのさと  
まきおつるまにまげひちりそきてうねもさうたは  
帯まよひのおねの御をそひしきさうあたるおのさと  
はたは秋も山ちほはなれをさうそがさく大おのさと  
さゆまよこりうたうらなは茶の露よ花のまじり  
こころは

ちるまの露のよちみなる花のあはれうたこりし  
こころはうらなはなるのまじりこりし  
任とはふらうそまじりたはのはおの長る  
よはんたるまじりまじりこころはなるのまじり  
こころは

さうらうまじりおのこころはなるのまじり

こころはなるのまじり  
こころはなるのまじり  
こころはなるのまじり  
こころはなるのまじり



光乎にみよるの心のははこそけよ方代のいあちりなれ  
一時代のいあちりなれ之海山の祇のあにさるわねを  
うたうはよはよけりえのいほほて罪をいひまはす  
若き子にひののねににまはねちちねを  
竹のそと天の露の露をまて我ももしるる  
かたし

雑歌

いづこにさしよあちりなれ  
若き子にひののねににまはねちちねを  
竹のそと天の露の露をまて我ももしるる  
かたし

いづこにさしよあちりなれ  
若き子にひののねににまはねちちねを  
竹のそと天の露の露をまて我ももしるる  
かたし



何合やまの下の山をさる根くいのよ清くくろし  
おくらまのこの地れ何よようきくろくくろく  
ふりて清くは人のおちまふまのけり山路を  
山道のくろきとよとくくよみゆるくく  
おくら根のありの音又ひききとく入れたる

夕暮る山路

夕暮るやひの光を蹴りけは清くきくろく山道の  
おくら

あつ細のそまろく不りをゆる地り友よよの清き夕暮  
おくら波のくろくくくくくくくくくくくくくくく  
つはねくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
みくらんははの沫のくくくくくくくくくくくくく

山道の火のくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あつ細のそまろく不りをゆる地り友よよの清き夕暮  
おくら波のくくくくくくくくくくくくくくくく  
つはねくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

山道の火のくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あつ細のそまろく不りをゆる地り友よよの清き夕暮  
おくら波のくくくくくくくくくくくくくくくく  
つはねくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

山道の火のくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

山七なまはのそまろく不りをゆる地り友よよの清き夕暮  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ふりしり舟人いりしきさのしくま山いけをぬる所  
浪よつてそはしほはよすす下し舟の極みまよひを  
塩田のその濱菰あそはは是不足に波のあつてむかひ  
あら磯の波よそかたてな相こころこのあつて使は  
浦ちのこかたる松の梢は波のあつて風いりし  
あはち極せとのちをち極はこころは波あつて海は  
はちりりさののちらんせよまこころあつてわらなる  
磯よさる波のけいこころあつて仲よるころやこころ  
さつてこれいみめかたてなひくはあつて心そ極く  
おつてさよまおつての心あつてあつてま舟はあつて  
今舟よあつてま後り今極をそいよまのこころ  
竹風撃つて

ふりしり舟人いりしきさのしくま山いけをぬる所に  
竹風撃つて

舟よさる波のけいこころあつて仲よるころやこころ  
さつてこれいみめかたてなひくはあつて心そ極く  
おつてさよまおつての心あつてあつてま舟はあつて  
今舟よあつてま後り今極をそいよまのこころ  
竹風撃つて  
舟よさる波のけいこころあつて仲よるころやこころ  
さつてこれいみめかたてなひくはあつて心そ極く  
おつてさよまおつての心あつてあつてま舟はあつて  
今舟よあつてま後り今極をそいよまのこころ  
竹風撃つて  
舟よさる波のけいこころあつて仲よるころやこころ  
さつてこれいみめかたてなひくはあつて心そ極く  
おつてさよまおつての心あつてあつてま舟はあつて  
今舟よあつてま後り今極をそいよまのこころ  
竹風撃つて

入はるけよのあぢはあぢよささふそそくひてきくむきう  
何となくくむむむよすむむむき井の水は氣くくく  
水の音はけきき龍の友をりや龍の尻の尾の尾くく  
八雲院のままとPくみり白川及びして村あはせ  
らねるにかきうして書入てきう牛くおよ水  
月のくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
れまのあぢや龍くおきう七月すく後ら白川の水  
田よ貝ありせきむとせきお給うよよ代て  
風くくくはをむむむくくくくくくくくくくくくく  
なまけくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
風吹く龍候はのむくくくくくくくくくくくくく  
はあぢよよ衣のくらの袖貝よよまはよ田のくくく

なまのくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
ふくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
はくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
なまのくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
かぢあぢよよ衣の袖貝よよまはよ田のくくく  
百首奇の中難十首  
はのそよよ衣のくらの袖貝よよまはよ田のくくく  
友よあぢよよ衣の袖貝よよまはよ田のくくく  
はあぢよよ衣の袖貝よよまはよ田のくくく  
我そのくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく

山とよのふれ夏1月よしのがけを吹きしめられた風の音ころり  
月をてそ詠いふころれ出のやうなる音よころりやなをそ  
はたさす、昔々の仲よこえる舟のほろりてよをささるは  
さころりのまよふころりてさたふく人のひらなる手は  
庚申のよふころりて音よまらふよ古今は  
探珍透こけを梅さす山吹ころりてさる 都ふり  
てころりころり  
古今梅をさる  
紅の色こき梅を折人の袖はわきまき、香やさるころり  
は探珍透ころり  
本風のふきさころりて梅の花ころりころりくわふり  
拾遺山吹ころりす

山吹の色咲け手の星ころりかやころり井ころりてさるころり  
月熊をさるころりころりころりころり  
そをいひて影をわころりかころり音ころりわらわて月影をさる  
都ころり  
いけもつあころり各所は歌もさるさそのちころりまを  
ものよのなをさるまははおひてあけのまころりおひのい  
おつころりのみゆりころりそあふゆつころりかころりそあふ  
あころりころりあころりこれあふまころりのをさるやはあふ  
わらわはよりころりまころりてゆわなる合てやつまふころり  
今年にまころりほりころり人よ初を對をして御る  
わらわもさるおひまころりまころりころりあふまころりあふ  
同様の竹の上人月の天まころりまころりころりてり  
た

ていつてはーは

いづれもあはれいづれ月影をなほしつゝはまをみよ  
堀河局仁科もは任付はるまはまはりし  
はれしはまをみよとありては福しきうねのひま  
まはりしはまをみよといふはまはる

あはれをみよといふはまのひまのひまをみよといふは  
まはりしはまをみよ

しーして雲ちをほし月影いづれぬかやれよといふ  
ゆのうきなうてすまはれまはるまはりしはま  
こくのわかん

下まはれしはまをみよといふはまのひまをみよといふは  
まはりしはまをみよといふはまはる

ていつてはーは

まはりしはまをみよといふはまのひまをみよといふは  
まはりしはまをみよといふはまはる

悔しきなりてはまはりしはまのひまをみよといふは  
まはりしはまをみよといふはまはる

まはりしはまをみよといふはまのひまをみよといふは  
まはりしはまをみよといふはまはる

まはりしはまをみよといふはまのひまをみよといふは  
まはりしはまをみよといふはまはる

いとあつたもすつらむとて心なれど  
そのらそのれもあおらうし  
結とて

よきすつら月を縁て整ふしむつことよ言はせれ

一

すむとふし月のあつたは言ひ言ひ  
看なりとたいたしを休むし  
山さし任付るをさし人さ  
やめていれつらさし

一

いづにらけぬ天の波のこをよはさ  
名こきて獨りものなるよは  
あるくやあつてにあさのみ  
ゆてまらるるて君をた  
りこゆてあつたさく  
くるらんあつてしと  
まよりて某の細の表  
一

一

山さしとふし月の任るら  
あつたは言ひ言ひ

一

あつたは言ひ言ひ  
あつたは言ひ言ひ  
あつたは言ひ言ひ  
あつたは言ひ言ひ



一の

手よりおぬさまはものごとを悔ひのしんたるの里  
命絶たぬさうの奇と我らたる御すまにお  
ととの御おしるささうして新境  
しまひしせらるる人さうしてくまひせらるる  
ゆてあうゆる想堂のまもる

おれ風つこまふをなほもるとうちうさあなげの

一の

おの風むのこまふのむいふちうさうとさよもの  
新境百首のこまふのむいふちうさうとさよ  
将えんがりのむいふちうさうとさよ  
一の

おの風吹つこたるをさうしてちうさよのむいふちう

一の

おれ風吹つこまふのむいふちうさうとさよもの  
たさあま俊城したあつめらうとさよとさよ  
つさうとさよ

おの風吹つこまふのむいふちうさうとさよもの

一の 俊成

おの風吹つこまふのむいふちうさうとさよもの  
おの風吹つこまふのむいふちうさうとさよもの  
おの風吹つこまふのむいふちうさうとさよもの

一の

おの風吹つこまふのむいふちうさうとさよもの



光に露うちやうすしのらさ

丁やうて命をぬらる人ちこころちたれいひふりて  
そまうのこころなる人乃こころかろくろく  
つりり

そ中にもあなまのや秋の月ほるる水のいこさ  
人あまのいしてひるにいくてあなまよひける  
一はるその竹をさきこてよめる

一すちよいてねまのそらひくこころつるやうま  
そ中へ大事にしてかて新代あなまの  
せぬまをわけてかてかて仁和ちれ  
かたよあまのいなるよまひてけんはあ  
さうしてあひる月あてておらる

かきこに新をさかしてすむ月をさる我こころ  
たぬまのいしてはるひまのてはるをれとはつもの  
ひのころてさかておりあれとわけて女房の  
ましくりる此文をよめて 若人す嗔打以  
何修忍辱

そ中にもあなまの便やなまはるおのよ買りあはる  
そつりてよくかておらる

あまのやいのころゆのむひまてかろはしあな  
なつてつわはるはははははははははははははは  
幻の愛まじつにみる人かてあなまをよまあはる  
このては人のおらるに

そのりてあなまの便をさかしておらる  
そのりてあなまの便をさかしておらる

二一 女房

めのおまにのりうそそり 子れよよに後を戻せなりうそが  
松山の岨は海よはくろくして蓮の池よはれよそそり  
波の立心の水をまのめつて嘆く蓮をよははらうこのよ  
ゆきあうなる人の新陸のうくこきちきうなるを  
ゆき一子よよようやれうなる馬返す

と  
もろ川つるそびくとしきる舟のまがーかたのいおがーと  
馬返すよーそあううん

つぐりひ寝てとせよあふ川そのいさ舟のいおがて  
うくPくうなるをゆき一子よてん

よぬかおきーやてはこーといよよのよたに

まにこころうなるをこし舞然いおんこころうなる  
よのまれちやけ寝の折りよあああおの社なるがれ

二二 舞然

志きーや寝あつそよちも夫のめこそはよと想あ  
たあ土の位おきーやあうあうあふの  
すのろくをよていおけろ

あうなる夫いよよのすれろくいおるよよも

述懐

何よにやあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ  
ふよあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

酒もろふれ水のすなきた何は月のひげやあふ  
いそ我情くくあふあふあふあふあふあふあふあふ

のうらさつあふれしよはさいなはあしていくつすくつ  
運るるふよのいやあふれしよはあふれしよはあふれしよ  
のうらさつあふれしよはさいなはあしていくつすくつ

五首目 述懐

さびしきよをいさしてやぶるあしをいさしてあひのるあは  
いづかかきながりてあしをいさしてあひのるあは  
みのよはれはあふれしよはさいなはあしていくつすくつ  
あふれしよはあふれしよはさいなはあしていくつすくつ  
これあふれしよはさいなはあしていくつすくつ

六首目 述懐

西を付くよをいさしてやぶるあしをいさしてあひのるあは  
あふれしよはあふれしよはさいなはあしていくつすくつ

そのまきを若き時よりいさしてやぶるあしをいさしてあひのるあは

七首目 述懐

我ちもや風をいさしてあふれしよはさいなはあしていくつすくつ  
あふれしよはあふれしよはさいなはあしていくつすくつ  
あふれしよはあふれしよはさいなはあしていくつすくつ

八首目 述懐

山はなれよすくつてあふれしよはさいなはあしていくつすくつ

九首目 述懐

あふれしよはあふれしよはさいなはあしていくつすくつ  
あふれしよはあふれしよはさいなはあしていくつすくつ  
あふれしよはあふれしよはさいなはあしていくつすくつ  
あふれしよはあふれしよはさいなはあしていくつすくつ  
あふれしよはあふれしよはさいなはあしていくつすくつ







故に此處に在るなるはそむれりなよとてしるし  
ふるはなほしそむしなほあせりしり昔の(おは)  
何と昔をまけしなほあせりしりある(おは)  
たつこのしりしりしりしりしりしりしり  
て人しりしりしりしりしりしりしり

昔やさのみろくの後ちしりしりしりしりしりしり  
大さのすの今(おは)しりしりしりしりしりしり

庭の志にやつる人しりしりしりしりしりしりしり  
洲のしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
なほしりしりしりしりしりしりしりしり

なれしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
大さのしりしりしりしりしりしりしりしりしり

海もなほしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
るに赤いしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
られしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
今(おは)しりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
むしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

山家集卷之中終

山家集卷之下

神祇歌

月れすむこをやうらうらに霞たててみける

月れすむこをやうらうらに霞たててみける

月れすむこを

さそこふあれのさめよひに霞のこもりけふはほろろをさそ  
里人の大ぬさおぬさたてちめてむさうむすものよは  
後志天五ちにこもりてむさうむすものよは  
あそくきりまきむさうむすものよは

任れねよのあそくはのきりまきむさうむすものよは  
任れねよのあそくはのきりまきむさうむすものよは  
任れねよのあそくはのきりまきむさうむすものよは  
任れねよのあそくはのきりまきむさうむすものよは



になんいろなるをみて

いづつよのまのつうれてあめれいなる産ぶは  
弁たおとせねても地のまはるはよ人の  
ちんくはれそゆりおかしてくしてま  
りりるよつやあけしよあゆまにいらして  
あうておそしまたさう入るしへの向れも人  
Pつあひし

天すやあゆちなあれであう十川もあをま  
あひ

あひやいこ人のつてもてるれ清くち  
弁たおとせねても地のまはるはよ人の  
ちんくはれそゆりおかしてくしてま  
りりるよつやあけしよあゆまにいらして

あひのきるまのつうれてあめれいなる産ぶは  
あまうつれはあまのまはるはよ人の  
ちんくはれそゆりおかしてくしてま  
りりるよつやあけしよあゆまにいらして  
あうておそしまたさう入るしへの向れも人  
Pつあひし

あひのきるまのつうれてあめれいなる産ぶは  
あまうつれはあまのまはるはよ人の  
ちんくはれそゆりおかしてくしてま  
りりるよつやあけしよあゆまにいらして

卯の坐の回をよ

あけてあつしつしつひのあつる星の月行くるらんちん

百首奇の牛耕福十首

牛學 二首

めつらしまあつらんちんの星の月行くるらんちん

あつらんちんの星の月行くるらんちん

笑花 二首

みづににわかれすまふそふ人のあてにまけてみせを

たのつみのちのあつらんちんの星の月行くるらんちん

雪山 二首

ふしのいほはふらんちんの星の月行くるらんちん

放生會

みづににわかれすまふそふ人のあてにまけてみせを

熊野 二首

みづににわかれすまふそふ人のあてにまけてみせを

あつらんちんの星の月行くるらんちん

みづににわかれすまふそふ人のあてにまけてみせを

あつらんちんの星の月行くるらんちん

あつらんちんの星の月行くるらんちん

あつらんちんの星の月行くるらんちん

釋教歌

心とてとありて佛の心とて  
佛の心とてありて佛の心とて  
佛の心とてありて佛の心とて

あゝ心はよりの風をふかぬ  
あゝ心はよりの風をふかぬ  
あゝ心はよりの風をふかぬ

ちりちりたるよの心とて  
ちりちりたるよの心とて  
ちりちりたるよの心とて

あゝ心はよりの風をふかぬ  
あゝ心はよりの風をふかぬ  
あゝ心はよりの風をふかぬ

あゝ心はよりの風をふかぬ  
あゝ心はよりの風をふかぬ  
あゝ心はよりの風をふかぬ

命を忍入を法儀すといふはありける

ひろむらんほはありぬ身なりしとあやむいぬは

こゝろ

ほくまの流なりしはの氷汲人のやふのやうに

たこの入を観音ちよと名をつくる年経縁す

へよより一尸つこまをいきて観音寺入をせし

奪つるは我をよつらぬよまをいきてせしとて

こゝろ

子 山くみすてかぬいふこもいふにほくそりや

阿闍梨持人下千人あつては華經縁

すなはたるよとあつて又の口はらそり

はらかり苦を名にいふとていふは

人のいふていふもつとせける

いふにたれ多くいふはあまのいふ

そよいふぬいふはなるゆゑいふあり

なる人のいふなるなるをいふは

いふはなるなるなるなるなる

いふはなるなるなるなるなるなる

ありたのいふはなるなるなるなる

いふはなるなるなるなるなるなる

いふはなるなるなるなるなるなる

懺悔業障といふ

かまひつさるるの梅一葉もあはれをそそぐに始む  
馮敬待詠花とよまを

朝日まつりをはやくとまはしはるる月れ新しき  
日のいさつとみゆ

波のうきをうきまよふとみゆの入口のいさつとみゆ  
見日思西とよまを

山のこころをうきまよふとみゆのいさつとみゆ  
曉念佛とよまを

夏やむらぎのひよにまはして十はの街ぬき  
鳥往せ人の文を

あかりのやまをうきまよふとみゆのいさつとみゆ  
人命不傳速於山ぬきの文のいさつとみゆ

山のこころをうきまよふとみゆのいさつとみゆ  
菩提心論とよまを

あはれぬきとよまをうきまよふとみゆのいさつとみゆ  
隨文とよまを

あはれぬきとよまをうきまよふとみゆのいさつとみゆ  
観心

あはれぬきとよまをうきまよふとみゆのいさつとみゆ  
五序品

あはれぬきとよまをうきまよふとみゆのいさつとみゆ  
方便品深著於五啟の文を

あはれぬきとよまをうきまよふとみゆのいさつとみゆ  
うりまはれはるるの園

あはれぬきとよまをうきまよふとみゆのいさつとみゆ

譬喻

とほしう人をまてははじりてまてこれ其のまていふと

五百弟子

をのほしうまていふとこれ其のまていふと

提婆

いかにまていふとこれ其のまていふと  
いかにまていふとこれ其のまていふと  
いかにまていふとこれ其のまていふと

觀持

天のまていふとこれ其のまていふと  
天のまていふとこれ其のまていふと

持

わーれ山月いふとこれ其のまていふと

はまていふとこれ其のまていふと

一心歌見佛の文をいふと

わーれ山月いふとこれ其のまていふと

和力早稲我誠度はいふと

いふとこれ其のまていふと

善賢

あまていふとこれ其のまていふと

心經

何とていふとこれ其のまていふと

甘上世尊提のいふと

わーれ山月いふとこれ其のまていふと

和力同座いふとこれ其のまていふと

とまらえちりつらわさすれおしつゝあつた人いふはるる

くら道のしつたよみなるよ地獄

飛人の志あふもなほりわつたの昔をなくすもあつたよ

鐵鬼

朝夕の子やあつたよよとまはけさるよすられたよあつたよ

高士

かくしきよあつたよよいひひれとれをあつたよ

修羅

よるよあつたよよいひひれとれをあつたよ

人

あつたよ人あつたよあつたよあつたよあつたよ

天

雪の上はあつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

百首奇の中釋教十首

あつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

あつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

あつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

あつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

世尊の美經 三首

あつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

あつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

あつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

千手經 三首

あつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

華ありてねはく園ひらけ  
○やとこのさるれ白に  
のあよのしろの香  
那人のしろもまよ  
又二首このころ  
○やとこのさるれ白に  
のあよのしろの香  
那人のしろもまよ

恋奇

ぬをよめてる恋

よはよこひしほく  
自門ゆ恋

たてそめてゆ  
候歌恋

おんけつるよこ  
夏人恋恋

あよとを夏を  
夏とのしらひる  
あよとを夏を  
あひこころよ  
夏とのしらひる



は胡

今朝は人の心ごとくして  
あはれなきはさるるはさるるの  
は胡時鳥

は胡時鳥

さうやうはさるるはさるるの  
は胡時鳥

は胡時鳥

さうやうはさるるはさるるの  
は胡時鳥

は胡時鳥

さうやうはさるるはさるるの  
は胡時鳥

さうやうはさるるはさるるの  
は胡時鳥

恨

さうやうはさるるはさるるの  
は胡時鳥

さうやうはさるるはさるるの  
は胡時鳥

海路

さうやうはさるるはさるるの  
は胡時鳥

は胡時鳥

さうやうはさるるはさるるの  
は胡時鳥

昔月れあふりつて心もそよむは人の心は  
清み水のはらけらるるはあふりつたうらむは  
こころのこころとよきとよき人こころは  
こころみあれの心はほくもほくや月れくる  
同社とて非なりとよきとよきとよき

天々る非れある  
かたのくたにちまよるは  
よひもよひもよひもよひも  
いけひもよひもよひもよひも  
後めめすくくくくくくくくくくく

寄梅意

おしやと何といふ一枝のこぼりぬ句ひをうは  
りまうよ一枝折一梅これ深くと神とよきとよき  
寄花意

寄花意

おしやと何といふ一枝のこぼりぬ句ひをうは  
りまうよ一枝折一梅これ深くと神とよきとよき  
寄花意

寄花意

おしやと何といふ一枝のこぼりぬ句ひをうは  
りまうよ一枝折一梅これ深くと神とよきとよき  
寄花意

寄唐二首

つよきて人のつよぬ海のひさしにふじの神の標ちまら

寄竹首三首

一方とてくるとしなまに我を也見いこわぬ人の竹首

寄霧三首

夕まふれ帰るこもさびれくれて天うあまなこ

寄紅笠三首

秋深しこれぬのぬふくくもやみらの色に神まうさ

寄花屋三首

秋まにみをおもむつ風の音はなまこてかま人のくみ

寄氷三首

まをる行下はの夜もしある物まこつをこもくもくしよ

寄水三首

秋油の底うるとめれてちれるくくやみきは池のせり

日

日行をいひるされるてれれあみのいろに神まうさぬ  
志しとらうに雲井のまきたて一月れ影を袂に隠は  
あなれとらうくあふあふむ月れおそにはやれを  
月をたそそやとめのおもひてりくくみらか  
うもるれ月まらうれてみー影のわはにまけいんおれま  
雲影のあすしきやれたけむぬおと人の月まらうさ  
秋の初の日や海がこころしく雲をまに影をわてやうは  
天来らあらしそいほるのへんそ月れくくまらぬん  
おとよふのけそあまらるるまら日まらぬ  
あがて

月をこゝろふれりしをこゝろしてこゝろのこゝろは  
おとこひびくははしつとこゝろをこゝろ月はくね  
ありひよの山のあるこゝろ天すは入る月を  
なげこゝろ月は物ぶこゝろこゝろこゝろこゝろ  
天のこゝろはあらしをこゝろこゝろこゝろこゝろ  
白砂のこゝろあつ月の中のはちつとこゝろ  
思ふよれをこゝろこゝろ神のこゝろこゝろ  
物ぶこゝろ月をこゝろこゝろこゝろこゝろ  
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ  
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ  
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ

なをこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ  
あつこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ  
おとこひびくははしつとこゝろをこゝろ月  
よこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ  
秋の月あつこゝろこゝろこゝろこゝろ  
高るこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ  
候はこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ  
くもこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ  
おとこひびくははしつとこゝろをこゝろ月  
あつこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ  
あつこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ  
あつこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ  
あつこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ  
あつこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ

天竺のわらわらひひをまわりの月日新本へてあはれそが  
秋の月志のこのれち枝よりそ志を歌や隈のほつ  
こひし人あはれぬのまきしそはつせりてなほ

意

救せぬくのこのまきしそをて社に身をしほみ  
打向よそのあらわしれをけしそももてみるよの  
山のりの甚おそと一めてほそむかへほそむか  
こまらむまののしほまうけしこらてそよこ  
歌くもそむかへのされほそむかとそよも  
何とれしそむかよおそむかあしりかやそむか  
何友のそむかておそむかあしりかやそむか  
あやめしそむかあしりかやそむか

秋

なまし川よのそむかあしりかやそむか  
まりこそむかあしりかやそむか  
おそむか神よをるはけしこむかみおそむか  
うたむかよそむかあしりかやそむか  
何えまむかあしりかやそむか  
ひのそむかあしりかやそむか  
おそむかあしりかやそむか  
おそむかあしりかやそむか  
右代の松風まけしおそむかあしりかやそむか

















哀借歌

悲なるわくの大事なうらうらう日月になりの  
花は咲くうらうらうをくそなりのりよふしを  
花は咲くよりやとくよふる花をくれ  
かきかつてきたるなをいりつはう  
てこれさうなをいりてきた

花は咲くよふつひを花は咲くよふつひとありの  
あまのつひをうらうらうをうらうらう  
情あふよふの命しるよふの命しるよふの命しる  
一

吹さるゆゑやみをはいりしは女のせのほやのふ  
院の小侍は倒るゝわく大事なうらうらう

月(一)はつとよて路(一)はつとよて  
其(一)はつとよて路(一)はつとよて  
あつとよて

一

おむ(一)はつとよて路(一)はつとよて  
地(一)はつとよて路(一)はつとよて  
る(一)はつとよて路(一)はつとよて  
さ(一)はつとよて路(一)はつとよて

定(一)はつとよて路(一)はつとよて  
あ(一)はつとよて路(一)はつとよて  
お(一)はつとよて路(一)はつとよて

お(一)はつとよて路(一)はつとよて  
お(一)はつとよて路(一)はつとよて

一  
回(一)はつとよて路(一)はつとよて  
る(一)はつとよて路(一)はつとよて

あ(一)はつとよて路(一)はつとよて  
待(一)はつとよて路(一)はつとよて  
人(一)はつとよて路(一)はつとよて  
お(一)はつとよて路(一)はつとよて

一

あ(一)はつとよて路(一)はつとよて

次ぬのり平をするおるの記とらるるはこれなり  
近頃花の侍を思ふ人なくして集りてるよ  
あつては

みづがむれ梅をばあふまひのこりてはるる  
一花のれをせおきかしてたに侍所へは  
あつてせらるるにせしむる今をまはるる  
こころかきけはなおりよれよふ侍  
こころあつるそのふれ侍もに在り侍  
よ大物をとるるやけり侍る志のせ  
おしめたるもて又人よのわたりて  
おの侍もにさしひるるよの侍も  
あつてはるるはあひらむる今

いつてはるるは

今を侍とてはるるは侍のねたの侍のあつてはる  
おしめたるもて又人よのわたりて  
あつてはるるはあひらむる今  
あつてはるるはあひらむる今  
あつてはるるはあひらむる今  
あつてはるるはあひらむる今

あつてはるるはあひらむる今  
あつてはるるはあひらむる今  
あつてはるるはあひらむる今  
あつてはるるはあひらむる今  
あつてはるるはあひらむる今  
あつてはるるはあひらむる今

クニ

後衣のうしろのまのこをなれとあはれ人のこをわすれ

田舎のふし付多人のまへ

天のうめ秋のそのま折るれや昔のま今もあはれ

クニ

何ぞぬきまされぬれぬのこ又のこをわすれぬ山あはれ

母のこをわすれぬ山あはれぬのこをわすれぬ人あはれ

しておのれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

おのれぬまをわすれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

伊のこをわすれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

おのれぬまをわすれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

限るぬのこをわすれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

父のまをわすれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

なまをわすれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

おのれぬまをわすれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

おのれぬまをわすれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

おのれぬまをわすれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

はなをわすれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

おのれぬまをわすれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

おのれぬまをわすれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

おのれぬまをわすれぬ人のまをわすれぬ山あはれ

今宵は天の山あはれの月をわすれぬ山あはれ

市海にこは内付ふしひなるよ九月十三日

くもをわすれぬ





くそとよいわたそをいなるまをいしちをけりしと  
侍燈大物を入るていさくちるしていさく  
つあすは信ふいさくちるていさく  
りちくまのいさくちるていさく

一

外しつむあはりのあつていさくちるていさく  
はあつていさくちるていさく  
たくひるま若の人のいさくちるていさく

一

いさくちるていさくちるていさく  
いさくちるていさくちるていさく  
いさくちるていさくちるていさく

一

いさくちるていさくちるていさく  
いさくちるていさくちるていさく  
いさくちるていさくちるていさく

一

いさくちるていさくちるていさく  
いさくちるていさくちるていさく  
いさくちるていさくちるていさく

一

いさくちるていさくちるていさく  
いさくちるていさくちるていさく  
いさくちるていさくちるていさく

一

いさくちるていさくちるていさく  
いさくちるていさくちるていさく  
いさくちるていさくちるていさく

まゝぬらるるもの事とては程なまれば其のやうな  
運ぶよして陽の影を袖にうつすは後入  
初冬のすそのかげの影をて昔の人よ夫をる  
けぬよの別けけけけけけけけけけけけけけ  
はのよとてとてとてとてとてとてとてとて  
をくれわて後入のむとてとてとてとてとて  
けけけけけけけけけけけけけけけけけけけ  
名おとく絶ちたはるるの影を袖にうつすは  
後入のよとてとてとてとてとてとてとてとて  
けけけけけけけけけけけけけけけけけけけ  
なつてとてとてとてとてとてとてとてとて  
程の南をの影を袖にうつすは

程の影を袖にうつすは

一 一 一 一 一

おとく絶ちたはるるの影を袖にうつすは

けけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

衣の影を袖にうつすは

一 一 一 一 一

影を袖にうつすは

けけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

影を袖にうつすは

一 一 一 一 一

影を袖にうつすは

あつて入る想を袖にうつすは

よいつてきりくる 舞臺

さうさあれの袖をあらうとて海にうもめくをさうさ  
けあらぬをうれとてさうさ衣をも買ふしては後には  
あつて人のあつた海をさうさ恨むとてさうさあつた  
いささか海をあらうとてさうさあつて人のあつた海を  
あらうとてさうさあつた海をあらうとてさうさあつた  
海をあらうとてさうさあつた海をあらうとてさうさあつた

一

さうさあれの袖をあらうとて海にうもめくをさうさ  
けあらぬをうれとてさうさ衣をも買ふしては後には  
あつて人のあつた海をさうさ恨むとてさうさあつた  
いささか海をあらうとてさうさあつて人のあつた海を  
あらうとてさうさあつた海をあらうとてさうさあつた  
海をあらうとてさうさあつた海をあらうとてさうさあつた

よいつてきりくる

さうさあれの袖をあらうとて海にうもめくをさうさ  
けあらぬをうれとてさうさ衣をも買ふしては後には  
あつて人のあつた海をさうさ恨むとてさうさあつた  
いささか海をあらうとてさうさあつて人のあつた海を  
あらうとてさうさあつた海をあらうとてさうさあつた  
海をあらうとてさうさあつた海をあらうとてさうさあつた

よいつてきりくる

さうさあれの袖をあらうとて海にうもめくをさうさ  
けあらぬをうれとてさうさ衣をも買ふしては後には  
あつて人のあつた海をさうさ恨むとてさうさあつた  
いささか海をあらうとてさうさあつて人のあつた海を  
あらうとてさうさあつた海をあらうとてさうさあつた  
海をあらうとてさうさあつた海をあらうとてさうさあつた



山家集卷之下終

西行小傳

西行諱憲清武衛校尉康清子也少而讀書最精弓馬特達和歌嘗出奧州仕天仁上皇每應制獻和歌恩遇日渥西行素有出樊籠之心保定三年終遂志自此周遊天下文治二年秋偶奧州路歷錄人君過鶴岡賴朝詣鶴岡祠西行立華表下賴朝怪而使問之西行答以實賴朝疾還而延之茅中因談問和歌及弓馬之事對曰某雖承箕裘世後悉廢焉但和歌每遇花月之興略終成耳無知其真旨也賴朝懇問帝指於是只告以弓馬之事賴朝乃命俊彥記之欵語盡夕明日至午而退賴朝頻留不止臨歸賜以銀福西行拜而受之及出營門便與遊兒而去高

雄之虎恒嫉西行之為人謂道世之士當一於道易事  
咏歌乎可憎倘或相見吾擊破頭徒身相語曰西行  
者天下之聞人也設有及於我者當如之何一日西行遊高  
雄山日暮矣叩文覺房而乞宿文覺悅甚以為得遂  
夙志乃張拳啓戶熟視之肅然歛手迎接既而曰  
久聞芳名今日相見幸甚欣然共語不覺更聞聖  
日進齋西行既歸徒身進曰上人盡踐言乎文覺  
曰汝等不見彼眼睛乎彼豈毀於我乎返毀我者也  
西行嘗曰和歌者禪定之修行也又曰我由和歌得佛  
法也常願佛涅槃日於花下死仍作和歌述之果  
以建久九年二月十五日卒

七百十五年之後世明治壬寅六月十四日於長明精舍





